

# 現代女子青年の友人関係の取り方と自己愛傾向、自尊感情との関連について

About the way of taking friendship of contemporary girls' youth  
and the relationship between narcissism tendency and self-esteem

田向 優  
Yu Tamukai

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：青年期，友人関係，自己愛傾向，自尊感情

Key words : Adolescence, Friendship, Narcissistic, Self-esteem

## 1. 研究目的

青年期における友人関係は、自身が社会に適応するための様々な役割を担っている。保坂・岡村(1986, 1992)は、青年期の仲間関係(友人関係)のプロセスとして、①ギャング・グループ、②チャム・グループ、③ピア・グループの発達段階があると述べている。しかし、保坂(2010)は仲間関係の発達には、ギャング・グループの消失、チャム・グループの肥大化、ピア・グループの遷延化といった変化が生じてきていると述べている。

また、小塩(1998)と岡田(2007a, b)はそれぞれ青年期の友人関係を自己愛によって分類した。両者の分類を比較すると、小塩(1998)は友人関係を4群、岡田(2007a, b)は3群と捉えており、一貫した結果が得られていない。その上、小塩(1998)が分類のために使用したNPI(自己愛人格目録)は、自己愛の健康的な側面を測る尺度なのか、自己愛の病理的な面も測定できる尺度なのかについても、一貫した知見が得られていない。

そこで本研究では、①小塩(1998)、岡田(2007a, b)で使用された友人関係尺度を再度検討し類型化を図り、各類型の特徴を把握すること、②NPIと自己愛の健康的な側面と病理的な側面の両方を測定することができる評価過敏性—誇大性自己愛尺度(中山・中谷, 2006)を基に、新たに自己愛を測定する尺度を作成すること、③自己愛傾向が青年の友人関係の取り方に及ぼす影響を検討することを目的とした。

## 2. 方法

### 調査対象者

都内の私立女子大学に通う大学生1年生から4

年生、大学院生計250名であった。筆者が学生に直接依頼をし、調査対象者の自由意思の下で回答が行われ、回答しないことで対象者に不利益が生じることはないこと、回答は研究のみに使用することと調査内容の説明をし、合意を得た者のみを対象とした。なお謝礼は提示していない。

### 調査期間

2018年11月16日(金)~12月11日(火)であった。

### 調査方法

個別自記入式の質問紙調査で行われた。授業時に筆者の依頼に応じてその場で回答する集合調査形式と、大学構内で筆者から個別の依頼に応じて回答する個別配布・個別回収式の2通りで行われた。回答は全て無記入で行われ、実施時間は依頼・説明・回答を含めて15分程度であった。

### 調査内容

調査内容は表1に示すように、設問1から設問5で構成されていた。

表1 質問紙の構成

1. 友人関係尺度 [設問1]
2. 自己愛人格目録 (NPI) (大石・福田・篠置, 1987) [設問2]
3. 評価過敏性—誇大性自己愛尺度 (中山・中谷, 2006) [設問2]
4. 自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) [設問3]
5. フェイスシート [設問4]

## 3. 結果と考察

因子分析の結果、友人関係尺度は適度な距離、真剣な関わり、恥の回避、積極的楽しさ、集団同調の5因子構造であった。さらに友人関係尺度について二次因子分析を行った結果、距離を取ろうとする関係と仲間を求め真剣に関わる関係の2因子構造となった。NPIは自己確信、自己主張、顕

示性、優越性の4因子構造であり、評価過敏性—誇大性自己愛尺度は先行研究通り誇大性と評価過敏性の2因子構造、自尊感情尺度は1因子構造であることが確認された。

(1)友人関係の取り方による自己愛傾向の違い；友人関係尺度の二次因子分析で抽出された2因子(距離を取ろうとする関係・仲間を求め真剣に関わる関係)を独立変数とする分散分析の結果、NPI合計は2因子とも有意であり、誇大性と評価過敏性は距離を取ろうとする関係が有意であった。例えば、距離を取ろうとする関係が低く、仲間を求め真剣に関わる関係が高い群ほどNPI合計は高く、その逆の群は低かった。また、距離を取ろうとする関係が低い群ほど誇大性は高く、評価過敏性は低かった。

(2)友人関係と自己愛傾向、自尊感情の相関関係；相関分析の結果、NPIの全ての下位尺度が誇大性と正の相関を示し、NPIは主に誇大性を測定することが示唆された。しかし「顕示性」が評価過敏性とも正の相関を示し、NPIには評価過敏性の要素も一部含まれていることが明らかになった。また、NPIと評価過敏性—誇大性自己愛尺度と自尊感情の関連は、NPIは「顕示性」を除いて自尊感情に正の相関、誇大性に正の相関、評価過敏性には負の相関がみられた。

(3)自尊感情と自己愛傾向が友人関係の取り方に与える影響；探索的に重回帰分析を行った結果、自尊感情が自己愛傾向を媒介して友人関係の取り方に影響することが示唆された。具体的には、自尊感情は友人関係の取り方に直接的な影響を与えるとともに、自己愛傾向を媒介させて友人関係の取り方に影響を及ぼしていた(図1)。自己愛傾向と友人関係の取り方との関連は、NPI合計が高いほど友人に対して、適度な距離は取らず、恥の回避もせず、積極的楽しさも求めず、逆に真剣な関わりや集団同調を求めることが示された。一方、誇大性が高いほど友人に対して適度な距離を取り、積極的な楽しさを求めることが示され、評価過敏性が高くなるほど、誇大性同様、適度な距離を取り、積極的楽しさを求めるが、恥の回避も行うことが明らかになった。

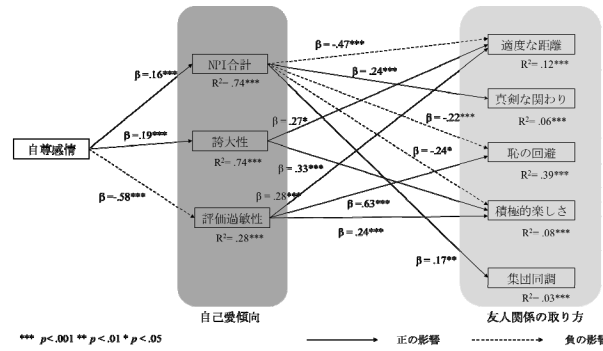


図1. 自尊感情を介して自己愛傾向が友人関係の取り方に及ぼす影響についてのパス・ダイアグラム

#### 4. まとめと今後の課題

以上より、友人関係尺度に関しては、元の尺度と比較すると項目の組み合わせが異なり、内容的にも新たな概念が抽出されたことから、対象者が異なることにより因子構造が変わる可能性も含め、友人関係を測定する尺度形成の難しさを明らかにするものであった。また今回作成されたNPIでは自己愛の健康的な面である誇大性と病理的な面である評価過敏性のそれぞれの特徴を部分的に測定はできるものの、全体の特徴を捉えるには限界があることが示唆された。そして、自己愛傾向から友人関係の取り方に及ぼす影響を検討した結果、NPIで測定できる自己愛の側面と誇大性・評価過敏性の側面が友人関係尺度の下位因子にそれぞれ影響を及ぼしていることが明らかになった。

今後の課題として、友人関係尺度及びNPIをより一貫性のあるものにする、また友人関係の取り方をより特徴づけるための検討が必要であると考えます。

#### 主要参考文献

[1]岡田努(2007a). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, **15**(2), 135-148.

#### 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所大学院研究助成(B)(DB3019)「青年期の自己愛傾向が友人のつきあい方に及ぼす影響」を受けて行ったものである。